

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 4 日現在

機関番号：12101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24730647

研究課題名(和文) 集団思考の深化を図る授業過程の構築に関する理論的・実証的研究

研究課題名(英文) A theoretical and practical study on lesson process of developing classroom thinking

研究代表者

杉本 憲子 (SUGIMOTO, Noriko)

茨城大学・教育学部・准教授

研究者番号：70344827

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、集団思考の質的な深化を図る授業過程の構築のために、集団的な思考の展開過程やその深化を促す指導のあり方について明らかにすることを目的としている。授業分析における子どもの思考研究の位置づけと分析視点について検討し、重要な視点として相互の関係と変化という点が挙げられた。また具体的な授業の分析を通して、子どもの思考とその深化の過程について、とくに授業におけるずれや問題がどのように顕在化し、発展するかに着目して分析を行なうとともに、子どもの思考や表現を促す教師の指導のあり方について考察した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to clarify the process of classroom thinking and effective methods for developing their discussion. Through examination of the position and analytical viewpoints of studies on children's thinking process in lesson analysis, it was found that relation and change are important viewpoints. Based on these viewpoints, I analyzed children's thinking process in classroom discourse, focus on the process of becoming aware of gap between their thoughts or finding problem to be solved and their developments. And teaching methods of encouraging children to think and express were examined.

研究分野：教育方法学

キーワード：教育学 集団思考 授業過程 授業研究

1. 研究開始当初の背景

近年、社会の変化や学力調査の結果等も踏まえて、求められる学力についての議論が進められてきた。情報の取り出しだけでなく、自分の既存の知識や経験と結びつけて熟考する力、知識・技能を活用する力が重要とされているが、日本の児童・生徒の学力にはそのような面で課題があるとも言われている。こうした力の育成には、問題となる状況を他の事柄や知識と結びつけて思考したり、問題を多面的に考察したりするなど、対象・他者との関わりを通して思考し、認識を再構築していく場が必要である。

上記の課題を踏まえると、相互の関わりによる集団的な過程を通して子どもの認識を発展させていく場の充実が求められる。集団思考については、これまで日本の授業研究において重要な位置を占め、その概念や組織化について研究がおこなわれてきたが、今日学び合いの場としての授業のあり方があらためて着目されている。

今日、学習における学び合いや対話という観点が重視される背景として、一つには学ぶという行為そのものが静的・固定的な知識・技能の習得あるいはその蓄積というとらえ方から変化してきたという学習観の転換が挙げられる。また、授業研究の枠組みにおいてのみならず、自他を認め合える関係の構築という課題も関わっている。グローバル化した現代社会では相互関係の中で思考し、行動する力が一層求められるが、一方で育つ環境の多様化や、他者との関わりの中で自己形成を行う機会の減少等の影響もあり、子ども相互が集団の中で学び合う関係を構築することは、学校や学級経営における重要な課題となっていると考えられる。

このような背景から学び合う場としての授業の役割が再認識されているが、その具体的実践にあたっては話し合いの深まり、聴き合う関係の構築などの課題が要請され、理論的基盤ならびに実証的研究を踏まえた授業過程・方法論の構築が求められていると言える。

2. 研究の目的

本研究は、集団思考の質的な深化を図る授業過程の構築のため、理論的基盤を踏まえながら、具体的な授業実践にもとづく実証的研究を通して、集団的な思考の展開過程やその成立・深化を促す指導方法や学習基盤について明らかにすることを目的としている。

とくに以下の点を課題としている。

- (1) 集団思考に関わる研究・実践の今日的動向や課題を整理するとともに、集団的思考の構造と過程に関する先行研究やその理論的基盤について検討する。
- (2) 具体的な授業の分析を通して、集団思考の展開過程とその深化を促す指導方法等

について考察し、集団的な思考の深化を図る授業過程の構築に関わる要件について検討する。

- (3) 学級を基本的な単位として営まれる学習活動において(2)のような集団的な思考の場が成立・深化するための指導方法や学習基盤について明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 今日の子どもの学力の状況や自己形成・他者関係に関する課題等を踏まえて、授業における集団的な思考の場のもつ意義を示した。また先行研究の検討を行ない、子どもの思考の動きとその相互関連が授業のどのような点に着目して研究されてきたかについて検討した。

(2) 集団思考の展開過程とその深化を促す要件等を具体的な授業実践に基づいて究明するため、授業研究を実施した。

具体的には、小学校国語、社会、生活科を中心とした授業の観察・記録を実施した。これらの授業記録の作成および子どものノート等を含めた資料の整理を行ない、それらに基づく授業の検討を行なった。

授業記録・資料等に基づいて、集団的な思考が展開されている場面を抽出し、子どもの思考の展開過程とそれに関わる指導方法等について分析を行なった。その際、上記の研究授業以外にも、本研究課題の究明に関連する他の実践記録等も分析の対象とした。

(3) 集団思考を促す指導のあり方やそのための学習基盤をどのように学級に構築すればよいかという課題に関わって、小学校の一学級を対象として、年間を通じての継続的な授業観察および授業者との協議を行なった。

4. 研究成果

(1) 今日の子どもの学力および人間形成上の課題を踏まえて、相互の学び合いの場としての授業が持つ意義を明らかにした。

今日の子どもの学力・学習状況から、思考力・判断力・表現力等の育成が求められていること、その育成のために現在の学習指導要領の下で重視される学習活動等について概観した。また考えを表現し伝え合う学習の成立には、互いの表現を受けとめ、高め合う学級の人間関係が土台となることから、今日重視される表現力等の育成という課題は、狭い意味での学力上の課題としてだけでなく、人間形成上の課題と関連させてとらえる必要があることが考察された。

そうした点を踏まえて現代社会における子どもの人間形成・他者関係の視点から、授業の役割をとらえ直した。現代は情報機器・環境の進歩により、常時つながることのできる便利な社会になった一方、つながりへの過剰な欲求や不安も生じている。安定的な価値基盤のゆらぐ社会の中で、多様な能力要請と

評価のまなざしの中に生きる現代の子どもにとって、身近な他者とのつながりと自己承認を得ることが重要となっており、自分と異質なものを含む他者と出会うこと、自己と向き合うことへの困難さを抱えていると考えられる。

そのような子ども理解に立つ時、授業という場合は、教材を媒介として子どもや教師が相互に関わる場であり、素朴な疑問や思いを出し合い、自分との違いを含めた互いの理解を深めていく場としての可能性を持つことを示した。

(2) 集団的な思考を考察する視点を検討するために、これまで授業分析において子どもの思考がどのような側面からとらえられてきたかについて考察した。分析の視点に注目すると、授業の展開や子どもの思考を関係(関係的把握)と変化(動的把握)という側面から把握しようとしていることが示された。

関係的把握については、教師の意図と子どもの動きとのずれ、子どもたちの間の考えのつながりや違いといった視点に見られるように、子どもと教師あるいは子ども相互の関係に着眼しながら、子どもの思考を把握しようとする。ずれ、つまずき、考えの対立やつながり等は、教師と子どもとの関係が集中的に立ち表れる点としてとらえられる。動的把握という点に関わっては、子どもの考えの変化、転換点や分節の変わり目など授業の変化をとらえる視点が挙げられる。つまり学習の結果としての認識だけでなく、子どもの思考が変化し発展していく過程が重視される。また、これまでの授業分析に基づく子どもの思考の研究について、名古屋大学教育方法学研究室の研究を中心に整理するとともに、授業分析を通しての理論構築を図る上での今後の課題を提示した。

(3) 集団的な思考が立ちあらわれる授業場面を取り上げて、子どもの思考とその深化の過程について分析した。とくに、授業におけるずれや問題がどのように顕在化し、追究されるかに着目し、その過程を段階的に把握した。

授業におけるずれに着目した小学校・社会科の授業分析の事例については、上田薫のずれの概念に着目し、その要点をずれにみる相互の主体性、ずれを介してのつながりと深化、発展するずれ、という3点に整理し、それを手がかりとした分析を示した。ずれが思考・認識の深化を図る契機としての役割を果たすこと、それが顕在化し追究が行なわれる過程は、子ども同士の考えにつながりが見出され、深化する過程でもあることが示されるとともに、ずれの顕在化とその追究の過程が段階的に把握されたことを分析の成果として示した。

また集団的な思考は、設定された問題を解決していくプロセスのみならず、問題となる事態を共通理解し、問題そのものが生成され

たり、それらが変化・発展していったりする過程においても重要な意味を持つと考えられる。そこで、何を問題として追究していくか、問題がどのように変化、あるいは焦点化されていくかという過程に着目しながら、小学校・国語の授業における子どもの思考の展開を分析した。考察の要点を以下に挙げる。

話し合いの過程で子どもたちに問題が共有され、その追究が展開されていく節目(問題となる事態の共有、問題事態に関する子ども相互の考えの表出、新たな視点にもとづく問題の展開、問題の展開を契機とした考えのとらえ直し)を整理して考察した。

問題追究を経てどのように子どもの認識が変化したかについて、単元当初の記述等との比較も含めて、授業逐語記録およびノートをもとに考察した。焦点が当てられた物語の事態について、話し合いを通して子どもたちは物語に即して具体的に想像していったことが考察された。

分析対象とした授業では、必ずしも学習の課題に対して直線的に話し合いが進むわけではなく、当初の学習課題から話題が転換されたり、元の課題に戻ったりしていることが考察された。そうした過程は、子どもたちが問題となる事態について共有したり、新たに重要な視点が見つかり問題が焦点化されるなど、追究の展開の節目としてとらえることができる。そうした節目がその前のどのような状況を受けて生み出されるか、また授業者自身の解釈と子どもの解釈の違い、つばやき等を含めた子どもの反応や考えの相互の違いや関連を見とる教師の役割という側面から考察した。

(4) 集団的な思考を成立・発展させていく授業づくりには、その基盤として自分の考えとの共通点や違いなど、他者と関連づけてとらえていく基本的な学習の姿勢や、自分の思いや考えを表現し、互いに聞き合える関係が必要である。そのための教師の手立てについて考察した。

学級の継続的な観察を通して、相互の考えの関連づけを図るための授業者の働きかけや指導法等について考察した。具体的には、座席表を活用して授業前の段階での児童の考えと相互関連を把握し、それに基づいた授業展開を実施することや、板書の工夫による子どもの考えの相互関連の可視化、またそれ以前の授業の板書を含めた掲示物の効果的活用、相手の考えを聞くことを重視した学習基盤づくり等が挙げられる。一授業時間内で展開される指導方法だけでなく、子ども同士の、あるいはこれまでの学習との関連付けを図り、学習を深化させるための手だてを具体的に把握することができた。

また、子どもの表現を促す手だてについては、長岡文雄および日比裕の論考をもとに検討した。長岡は、子どもの人間形成における自己表現の意味を重視し、作文や考え合う授業など書く力や話す力を育てる実践を展開

している。その指導の重点を子ども自らが表現したいという意欲や必要にせまられるような場や関係を育てることに置いている。また、日比は子どもの表現や学習を見とる視点や、子どもが発言する場の設定と発言しやすい発問のあり方等を含めて、自己表現を促すための手立てについて述べている。長岡、日比の論考に基づいて整理すると、子どもの表現を促すための2つの側面、すなわち第一に、子どもの表現の場の設定方法、第二に、子どもが表現したものや学習の過程を認め評価するという点が着目された。

この2つの側面を踏まえて、授業において子どもの思考や表現とその相互の交流を促す教師の指導のあり方について授業事例を取り上げて考察した。まず、子どもが表現しやすい場の設定という観点から、多様な考えを列挙する過程で子どもの認識が深まる授業場面を取り上げた。子どもにとって身近で多くの子が考えを列挙できる発問が、主体的に学習に関わり、理解を深化させる土台として有効であることが示された。

次に、子どもの表現を見とり、話し合いを深化させる授業場面の事例を取り上げ、そこでの教師の指導のあり方について考察した。子どもの考えを中心とした話し合いで展開される授業では、一見教師の指導性は弱いように見受けられる。しかし、課題を焦点化し、子どもたちを問いに立ち止まらせ、納得のいく考えが出し合えるように、教師が働きかけていることが考察された。授業における教師の指導性とは、必ずしも適切な読み取り方に関する直接的な指導や方向付けのみを指すわけではない。また一方で、子ども相互の話し合いの場であるからといって、子どものやり取りに任せることで学習が深まるとは言えない。子どもの発言・表現を見とり、その課題を焦点化し立ち止まらせるような関わり方も、話し合いの深化を促すための重要な側面であることを示した。

考えを表現し合い、発言相互の関係を認識して思考を深めていく学習基盤づくりとそのための有効な指導方法・働きかけについて、学年的な発達段階や年間を見通した段階的な指導過程などの点も含めて、今後更に研究を進めていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3件)

杉本憲子「話し合いの授業にみる子どもの思考の深化に関する一考察 問題とその発展に着目して」、茨城大学教育学部紀要(教育科学) 第 64号、295-307、2015、査読無し。

杉本憲子「他者とのつながりを考える：今日の課題と授業という場の可能性」、考える

子ども、No.356、16 - 19、2014、査読無し。

杉本憲子「子どもの表現および話し合いの深化を促す教師の指導のあり方に関する考察」茨城大学教育学部紀要(教育科学) 第 62号、447 - 457、2013、査読無し。

〔学会発表〕(計 1件)

杉本憲子「話し合いの授業にみる子どもの思考の深化に関する一考察 問題とその発展に着目して」、日本教育方法学会第 50 回大会、2014年 10月 11日、広島大学(広島県・東広島市)。

〔図書〕(計 1件)

的場正美、柴田好章、サルカール アラニ・モハメッド レザ、杉本憲子、副島孝 他、溪水社、『授業研究と授業の創造』、2013、pp59-75。

6. 研究組織

(1)研究代表者

杉本 憲子 (SUGIMOTO, Noriko)
茨城大学・教育学部・准教授
研究者番号：70344827

(2)研究分担者

無

(3)連携研究者

無